

佐藤慶太郎と別府市美術館

——別府市美術館移転新設五周年にあたって——

今村 弥生

I

国道一〇号線沿いにある上人ヶ浜公園^①は、古くから「白砂青松、相映帯して藍靛^{てい}なせる海に沈み、小泉石の靚あり^②」と謳われ、また、「六勝園記」^③には美しい海岸線の様子やクロマツの海岸林、史跡の豊富などが誌され、風光明媚なこの地の姿を謳っている。

また、鎌倉時代の遊行上人一遍の上陸伝説もあり、現在でもその名残りとして上人ヶ浜の地名となつて呼び親しまれている。

さらに、この浜から山手に広がる鉄輪温泉^{かんなわ}周辺にも一遍の伝説は多く、特に建治二年（一二七六）一遍開基と伝えられる永福寺^④には一遍上人の木像^⑤が安置され、毎年九月の彼岸には、上人の徳を讃える上人像の「湯あみ祭り」^⑥が行なわれ鉄輪の秋の風物詩となっている。

さらに南北朝時代と推定されている寺宝「遊行上人絵巻」^⑦は別府市の重要文化財に指定されている全長約一四九七・六cm縦三一・五cm程のみごとな絵巻物である。

また、都市開発のためほとんどの海岸線が埋め立て整備された今日、市街地から最も近い唯一残る自然海岸公園でもあり、近年、JR別府

大学駅の開通をみて、多くの人々の憩いの場として親しまれている地である。

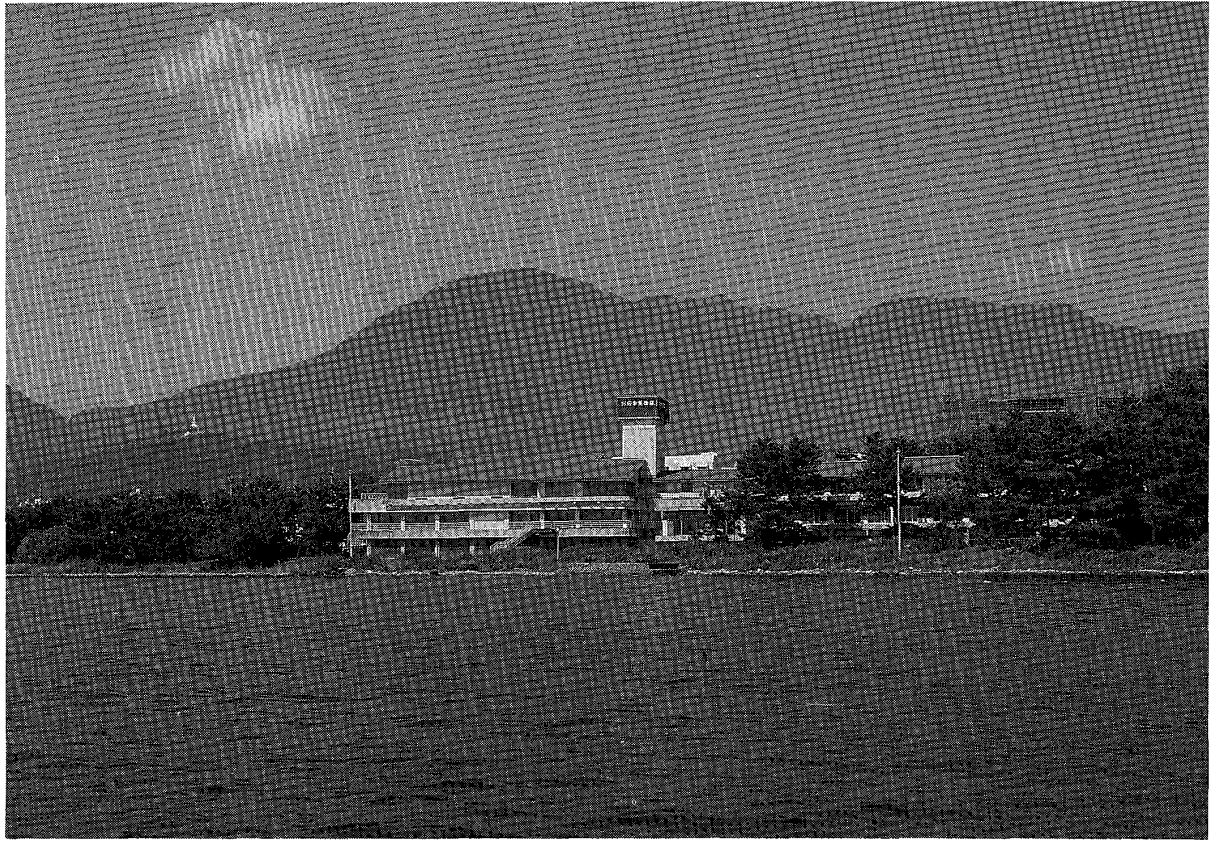
このように、自然と史跡に恵まれた公園の一角に別府市美術館（挿図1）が移転開館したのが昭和五十九年（一九八四）五月十日。

それまで当地にあったホテルの建物^⑧の寄贈が発端となった。すなわち、鉄筋コンクリート二階建の建物を改装整備し展示室等に当てた。収蔵品は美術館所蔵の絵画、彫刻をはじめとする美術品^⑨、さらに郷土資料館「別府ふるさと館」^⑩に所蔵されていた民俗資料等、また個人的な展示作品として話題を呼んだ富永一朗漫画原画^⑪など多岐にわたり、常設展示主体の美術館として開館に至った。

以上のような特徴をもって開設された当館も、平成元年（一九八九）五月十日には開館満五周年を迎える。

この間、多くの見学者を迎え、その存在は好評を得るものであった。

また、常設展示主体である展示活動から生じる資料公開の活動低迷をさけるため、県内外の企画展等^⑫に参加、多くの新鮮なデータを収集



挿図1 別府市美術館全景

して来た。

さらに、各方面への広報活動、ワークシートの検討、地元への普及活動など徐々にではあるが当館の特徴を示す活動体制を示しつつある。

しかし、このように五年間の活動を回顧してみるにあたり多くの反省材料と課題が含まれている事は言うまでもない。

さて、現在地での歴史は浅いものの、美術館創設の歴史は古く、昭和二十五年（一九五〇）まで遡る事ができる。そしてその発端に位置する一人の人物、佐藤慶太郎（写真1・2）の存在を忘れてはならないだろう。

慶太郎はこれより以前、大正十五年（一九二六）に開館した東京府美術館（現、東京都美術館）の設立に際し、現在の価格として二〇億円^④（当時で一〇〇万円）、を寄贈、開館に尽力した人物として知られているが、当館の開設も、慶太郎の寄付金なしでは考えられなかったものである。

しかし、当時の慶太郎に関する資料は両館とも非常に乏しく、それでも東京都美術館では調査が進められているが、当館にあつては「美術館設立基金の寄付者」とのみその冒頭に記されているだけである。

開設当時の美術館長・故兼子鎮雄氏が執筆したという『佐藤慶太郎伝』^⑤は現存しておらず、また、開設一周年目の記念として開催された「佐藤慶太郎を偲ぶ座談会」^⑥並びに「故佐藤慶太郎氏所蔵画帖・現代美術作品展」^⑦等の資料も残念ながら残っていない。

その後、慶太郎に関する資料を収集する機会も得ないまま現在に至っているのは、大きな反省を要する事であった。

そこで本稿では、時代とともに不明瞭になる事を危惧される佐藤慶太郎の存在を、再度明確にし、さらになし得るならば、慶太郎が美術館に何を期待し、その設立に尽力したのかを探る事によって、新設移転開館五周年という節目にある当館の反省材料と今後の課題にするものである。

II

当館と佐藤慶太郎との関わりを示す資料は、前に述べたように非常に乏しい。

三十年近くの歳月の経過と、美術館自体の特殊な存在経緯（展示室のみの存在やたび重なる移転、又、展示室を市結婚式場と併用することによる一次閉鎖の歴史）から見れば無理からぬ事と言えよう。

わずかに昭和四十八年（一九七三）別府市制五十周年記念に別府市より発行された『別府市誌』に「美術館の誕生」として記述されているのが唯一の記録資料である。

そこで本稿を書くにあたり、東京都美術館より数点の資料の提供と、慶太郎が設立した財団法人日本生活協会^①発行の関係書を得る事が出来たのは幸運であった。

ここで参考までに『別府市誌』に掲載されている美術館設立の経緯をあげておこう。

以下はその文章の引用である。

「御大典記念として東京都美術館をただ一人で建設して東京都に寄付した佐藤慶太郎は、その晩年を別府で過ごし、美術館建設基

金として一〇万円の大金を市に寄付した。

氏は七三歳で他界されたが、その意志をつぎ実行に移さねばと、美術館設立の議が起こった。

同二十五年度に市は予算一〇〇万円を計上して、公民館の階上（現在の三階）を改装し、当時の県美術協会長権藤種男^②や市学校教育課長（元東京美術学校教授）三浦直政^③らが中心となり、現代作家の作品収集にかかった。

福田平八郎^④幹旋の日本画と、佐藤敬幹旋の洋画、計二十点を陳列した。

同二十五年十月一日であった。」

当初、美術館に残されていた沿革史に記載されていた寄付の年月日は確かなものではなく、昭和九年（一九三四）から十三年（一九三八）の間らしいとされていた。

しかし、今回の調査で、昭和十六年（一九四一）である事が判明した。^⑤

慶太郎はその前年に七三歳で没しており、この寄付は、彼の養子、佐藤与助によって行なわれ、慶太郎の遺言であった旨記録されている。

慶太郎は昭和九年（一九三四）現在の別府市野口中町に住居を新築し、北九州から転居、晩年を別府で過ごしている。

ではここで、昭和十六年当時の一〇万円を現在の値にするとのようになるのか、又同二十五年ではどうなるのか、参考までにあげてみたい。しかしこれは単純計算であり、あくまでも本稿の上での参考である。

昭和五十六年（一九八一）発行された『値段の風俗史 明治・大正・

昭和』（週刊朝日）によれば、昭和十六年の場合同年発行の朝日新聞（朝夕刊セット）の一ヶ月の購読料は一円二〇銭、同六十三年では二、八〇〇円である。要するに、昭和六十三年の一ヶ月の購読料は昭和十六年の約二、三〇〇倍となり、従って、昭和十六当時の十万円は現在に換算すると約二億三、〇〇〇万円程になろうか。

又、同二十五年の場合購読料は、一ヶ月五三円、前と同様に値上げ幅を換算すると約五三倍程になるので昭和十六年当時の十万円は、およそ五三〇万円という事になる。

寄付をされた昭和十六年は、太平洋戦争が始った年である。

生活状態の悪化や戦争対策に迫られ、また、終戦の混乱から脱するまでに、貨幣価値は大きく変動し、独立施設としての美術館建設には至らなかった。

当時市内にあつて、ドイツ復興様式に和風を採用した公民館（現、別府市中央公民館）の最上階に展示室を設け、すでに同館に開設していた別府市立図書館の管理下に置かれた。

図書館長が美術館々長を兼務し、収集品の一般公開を機として別府市美術館の開設としている。その後昭和二十七年（一九三七）四月十七日付け、文部省告示第一三号で準博物館指定を受けた。

独立施設の美術館建設に至らなかった事は残念であるが、規模は別としても、当時としては先端を行く美術館施設のオープンであったにちがいない。

開館より十四日間の間に三、五五八名の見学者が訪れ、同年十月三十一日発行の「美術館報」第一号に掲載された「来館者の声」には次の様な感想がよせられている。以下に代表的なものを紹介しよう。

「これほどの絵があつめられているとは知らなかった。九州では他に絶対に見られないものであり、文化都市の名にふさわしいよい施設である。」

「児童や初心の人々には少々程度が高いかもしれないが、そのよくな人々こそ理解せしめるよう努力するのが本当の文化運動ではあるまいか。」

「美術館開設の動機を与えられた佐藤慶太郎氏の顕彰方法も考えられてよい。写真や塑像も備えてはどうであろうか。」

開設当初、設立基金寄付者としての佐藤慶太郎の顕彰は、先にも述べた出版物が当時の美術館長によつて制作されてはいた様だが、広く知られるまでには至つていなかったようだ。

昭和三十五年（一九六〇）慶太郎の遺族の方より岡田三郎助作の「佐藤慶太郎肖像」（写真Ⅰ）と朝倉文夫作「佐藤慶太郎像（胸像）」（写真Ⅱ）を市が譲り受け、以後その顕彰に努めることとした。

では、美術館建設に尽力した佐藤慶太郎とはどのような人物だったのだろうか。

その生涯に触れるにあつて、大きな参考となつたのが、先にも記した生活協会発行の『美術館と生活館の創立者 佐藤慶太郎』（昭和四十九年 加藤善徳著）であつた。

この本は昭和二十七年（一九五二）初版が発行されているが、再刊本には初版に間に合わなかつた朝倉文夫の序文が加えられ、表紙の装丁も変えられているとの事である。

ちなみに、著者の加藤善徳氏は、佐藤慶太郎の生活館創立に参加し、社会福祉法人日本点字図書館事務理事などを務めた人である。^⑦

また、これより以前の昭和十七年（一九四二）には「佐藤慶太郎翁伝記編纂会」の依頼で生活協会が発行した『佐藤慶太郎伝』（加藤善徳著）もあり、その巻頭には当館所蔵の「佐藤慶太郎肖像」の複製図版で飾られていたようである。²⁶

上記の書籍に加え、今回東京都美術館より提供いただいた「佐藤慶太郎と東京府美術館 I・II」（『東京都美術館紀要 XI・XII』一九八六・八七 斉藤泰嘉）などを参考に、以下、佐藤慶太郎の生涯に触れてみたい。

III

佐藤慶太郎は、明治元年（一八六八）十月九日、現在の北九州市八幡区折尾町に父孔作、母なをの長男として生まれた。

佐藤家は、この地方の旧家であつたらしいが、慶太郎が生まれ育つた家庭は赤貧の暮しの中にあつた。

小学校を卒業した慶太郎は近所にできた漢学の私塾で学び始める。

幼年期の彼は胃腸が弱く、両親は「これで育つかしら」と、よく心配していたという。

性格も内気であり、遊びも、おはじきやままごとなどが専らで、友達も女の子ばかりだった。

しかし、気だてが良く、両親の苦勞を早くから知っている彼は、親類や近所の老人たちから「まるでおとなのようだ」と言われていた。

私塾で一心に勉学にはげむ頃から、幼年期の内気さやひ弱さも消え、塾生五六〇名のトップにあつて、塾生をつかまえては議論をたたかわ

せていた。

その後、漢学以外の勉強がたくて一次山口県の研湾学舎に入るが、体が弱いのと、学資が続かず退学を余儀なくされた。

一計を案じた彼は、五軒の親類から合計一円八〇銭の学資を毎月送ってもらう約束を取り付け、四九名の合格者中一番で福岡の修猷館へ通つた。明治十九年（一八八六）満一九歳の頃であつた。

その後熱心に勉学に励むが、東京で学ぶ友人の刺激を受け、法律家を志し神田駿河台の明治法律学校（現、明治大学）に明治二十年（一八八七）入学、明治二十三年（一八九〇）七月に卒業するが、病弱な体質は変る事なく、弁護士試験の準備もできない状態となり、帰郷せざるを得なかつた。慶太郎二二歳の年であつた。

志あつての上京だつただけに、失意も一層大きかつたのはいうまでもないだろう。

しかし、明治二十五年（一八九二）、慶太郎の一大転機が訪れる。日本の重工業の勃興期を迎え、石炭の需要が増大する時期であり、彼は最も盛んに石炭を取り扱っている若松の山本商店に入る事になつたのである。

法律家志望とは全く異なつた実業家への一歩であり、それと同時に山本の義妹であるトシ子と結婚、以前から山本商店で働いていた妻に商売の手ほどきを受ける事となつた。

慶太郎は石炭商としての商売の實際を身につけるとともに、品質のちがひ、用途別の石炭分類、また、石炭業の合理的経営方針などを熱心に研究した。

やがて石炭を一目見るだけで何炭鉱のどの層のものであるかが解る

ようになった。

これについては、次のような面白いエピソードがある。

ある日慶太郎は門司の石炭置場を仲士とともに歩いてきた。途中石岩が一塊り落ちていたのを彼は拾い上げ、一瞥したのち片側の石炭山に投げ上げた。その両側には、一方に藤棚、一方には本洞という鉱区⑧の石炭が分けられてつまれていたのである。

不思議がつて仲士が慶太郎に問いかけると「そりゃあわかるさ。ぼくは、若松にくる石炭という石炭は、みな見ている。毎日見ているから色合いや、われ具合や、縮みのもようなどを見ると、すぐ判別できるんだよ」と、事もなげに答えた。⑨

いつしか、周囲から「石炭の神様」といわれるようになった所以である。

明治三十三年（一九〇〇）、慶太郎三三歳の年に山本商店から独立、三坪一間ではあったが、佐藤商店の旗あげをした。

のち、明治末から大正にかけての二十年間に石炭業で財をなし、大正七年（一九一八）若松市議会議長に推された。

しかし、業界の第一線で活動していた慶太郎であったが、持病の胃腸病が悪化しており、彼の最も信頼していた主治医、野口雄三郎博士から「一切の事業から手をひいて静養しなければ生命の保証はできない」と、忠告をうけ、大正八年（一九一九）、実業界から引退する事となった。慶太郎五十歳代のことである。

これより以後、慶太郎は「学者でも政治家でもない私に出来る事は、真面目に働いて得た浄財を以て、世のため人のために捧げるといふ金銭奉仕が、私の描く最高理想でありました」と、語る通りに、社会奉

仕の道歩く事となった。

彼の主治医であり、バセドウ氏病の研究で世界的にも有名であった野口雄三郎⑩、慶太郎の養子である佐藤与助（元東北大学教授）達は、慶太郎の育英事業によって育った重要な人材である。

大正十年（一九二一）の石炭鉱業連合会の創立をはじめとして、育英事業、公園、病院、各種研究所の設立等、その奉仕事業に枚挙のいとまがない。

そして大正十五年、東京府美術館の設立に尽力、同年、勲三等に叙せられた。

昭和十年（一九三五）には、慶太郎最後の偉業として佐藤新興生活館（現、財団法人日本生活協会）を建設し、国民生活新運動の促進を計るに至った。

昭和十五年（一九四〇）、別府の自宅で新年を迎えた彼は、義母の病氣見舞いに出かけ流感にかかる。

高熱が出て、急性肺炎と診断されるが、医師と雑談をする程元気であったのに、一月十三日の夕刻、急に悪化をきたし、七十三歳でその生涯に幕をおろした。

同年一月十八日に、別府と東京で同時刻に簡素な告別式が行なわれた。⑪

以上が、佐藤慶太郎の生涯のあらましである。

「富んだまま死ぬのは、人間のはじである」という、カーネギーの言葉を信条としていた彼は、毎年遺言状を書き改め、いつでもその時の準備をし、その結果総計一八〇万円（昭和十五年、一月十三日の有価証券時価）⑫の遺産は、全て慶太郎ゆかりの地での社会福祉事業、教育

事業にささげられた。

そのひとつが、別府市美術館設立であった。

美術界とは全く無縁な世界にいた慶太郎であったが、その理想主義的精神で、美術館の意義をも正しく理解していたと言えよう。

このことについては大正十年（一九二一）四月、彼が東京府に提出した美術館設立資金寄付願いに認められている趣旨を読むと明らかである。

その大まかな内容とは、次のようなものである。

「日本は東洋の美術国として、また世界の美術国として誇るものがあるにもかかわらず、まだ一つの常設美術館も持っておらず、我國の識者は海外に対し常に忸怩たる思いを抱いているからであり、また、これでは、我國の古美術の保護を永遠に期し、新美術の進展を促すことにはならないと思うからである。」^⑧

また、別の折、新聞記者の取材に答えて、「自分は美術については、何の知識も趣味も持たないが、常設美術館が新設される事によって、本邦特殊の古美術品の海外流失を防ぐ事が出来、帝室及び貴族富豪等の家庭に秘蔵されているところの古美術品を、一般の観覧に供することが出来るようになったら、国民思想を振興し、品性を高める上に、頗る有意義なものになるのではないかと信じている。――以下略――」^⑨

以上のような、東京府美術館への設立趣旨が、すべてそのまま当館に当てはまるわけではないが、当時、当館設立に関わった人々が、この趣旨を全く知らなかったとは推察できない。

なぜなら、当時中心となって美術館設立に関わった人々は、当時中央にあって活躍しており、又、美術界にあっては、大きな話題となっ

たはずであるこの東京府美術館設立の過程を何らかの形で知り得たのでは、と考えられるからである。

東京府美術館は、後、慶太郎の希望する常設美術館としては開館しなかったが、逆に別府市美術館の場合は、活動内容は別としても、当館開設当初からの方針は「常設展示主体」であり、今後も現時点では変更は考えられない。

ともあれ、先述のような推察は、あくまでも慶太郎の「かなわなかつた常設美術館構想」への、著者の感傷的な回顧であるにすぎないが。

以上のように、佐藤慶太郎と当館との関わりを、当館の沿革と慶太郎の生涯を中心に述べたが、これらは、極めて大まかなものであり、今後何らかの機会を得て、慶太郎に関する資料を収集して行かなければならないだろう。そのためには慶太郎に関わりのあった人たちからの情報・資料の提供を期待したい。

また、慶太郎の生涯に触れ、その精神を知る機会を得た今、別府市美術館の生みの親である彼の、美術館に対する期待を、少なくとも美術館関係者は忘れてはならないだろう。

IV

昭和六十三年（一九八八）四月に発行された博物館情報誌『Museum Data』（丹青総合研究所）によると、同六十二年（一九八七）十二月三十一日現在の、全国美術館数は五七九館、その約半数の館は比処十年間に開設され、今日、各種の報道で言われるような「美術館ブーム」という形容もふさわしいものではないか、と報告している。

また、社会教育、生涯教育という言葉や概念も、広く人々に浸透している現在、社会教育機関としての美術館の存在も、そのあり方が問われ、また、多様化する利用者（見学者）に対して、いかに対処して行くかが課題となって来るであろう。

特に、常設美術館として今後も活動して行くとする当館にあっては、どのようにその特性を生かし、利用者（見学者）にアプローチして行くかは、大きな課題である。

常設館の特性でもある研究機関としての機能の充実はもとより、従来のように所蔵品の展示のみを活動の中心にする事にとどまらず、所蔵（展示）作品についての独自の資料や図書（文献等）資料、又、関連資料等を積極的に収集、保存、公開（閲覧）できるように、図書館的な機能を備える事も、常設館として活動して行く上で、重要な教育普及の要素ではないだろうか。

これらの事は、利用者（見学者）に対して、所蔵（展示）作品についての、より深い理解の手助けともなり、また、地域への美術教育や美術研究のための利用者（見学者）に対する、貴重な情報提供になるものである。

また、別府という地域性（観光都市）に目を向けるならば、国内外から訪れる観光客をも含めた利用者（見学者）に対するサービスとして、つまり、美術館所蔵品のカタログや絵ハガキを発行し頒布することなど、その活動内容は、さらに広がりをもつであろう。

そして、そのような活動が、当館の個性ともなり、地域に密着した、開かれた美術館としての、本来の美術館の使命を達成するものにもなるのではないだろうか。

又、将来、地域への教育普及のより一層の充実を考慮するならば、「常設展示主体」の当館のあり方が、多様化する利用者（見学者）の要望に答えられるか、否か、の問題は、検討を必要とする課題になるう。

地域文化の向上を促進し、開かれた美術館として、公衆の参加できるスペースの準備も今後、検討の必要な問題ではないだろうか。

以上のような事柄をふまえた上で、新設移転開館五周年を迎えた当館が、今後どこまで利用者（見学者）に、意義ある情報提供及び活動をして行けるかが、大きな課題である。

註

① かつて、別府の海岸は南の朝見川付近から、北の端の上人ヶ浜までクロマツが自生する海岸林を形成していた。

しかし、都市開発が進み、現在自然海岸とクロマツの林が残っているのは上人ヶ浜のみとなっている。『別府市誌』第一章第二節二と三（別府市役所）昭和六十年参照

② 『別府市誌』第二十一章第三節「上人ヶ鼻」（別府市役所）昭和八年参照

③ 美術館周辺を通称「六勝園」と呼び親しまれている。以下がその由来と内容である。尚、この原文は、別府市美術館所蔵となっている。

「新地居於大別府之中央

海岸白砂青松 有温泉与清水湧出

乃以兼温冷海三浴 而古昔高一遍上人

九州巡錫登岸之舊趾

他其趾仍在風光明媚 可掬銀波而

仰青山足以樂心目 且往来尤便

蓋此園勝於他者有六

故題之謂六勝園為「」

- ④ ⑤ ⑥ 別府市風呂本 時宗永福寺、本尊は阿弥陀如来立像、江戸期には松寿庵と呼ばれていた。

湯治場については、永福寺縁起に由来する。「一遍上人木像」については、高さ約60cm、重量約10kg、寄木造りの坐像

- 「湯あみ祭り」については、江戸期には年四回行なわれ(春・秋の彼岸、正月、八月二十三日)その後火災によって永福寺が焼失し中断となるが、昭和三十五年(一九六〇)より年一回の祭りとして復活させた。『別府市誌』第三章第二節の六「古くから寺社とまつり」(別府市役所)昭和六十年参照

- ⑦ 時宗教団の発展にともない、一遍没後まもなく盛んに制作された。聖戒編と宗俊編の二系統に大別されるが、永福寺の絵巻は宗俊編のものとして、全一〇巻中の第七巻目、二祖他阿(一一三七一—一一三一九)の行状を描いたものとされている。紙本着色、巻末に「浄光明寺代物の寄附、遊行半日圏(在郷)」と記されている。

宗俊編は徳治二年(一一三〇七)成立。原本は伝存せず、転写本が一五種程知られている。紙本着色一〇巻。

絵巻は前四巻が一遍(一一三九—一一二八九)後六巻が他阿の行状にあてられている。一遍と他阿の法系を強調する傾向が強く、広くもちいられた。『世界美術辞典』新潮社(昭和六十年)、『別府市の文化財』別府市教育委員会(昭和五十八年)参照。

なお永福寺蔵一遍上人絵巻については、次の紹介がある。「永福寺蔵遊行上人縁起絵巻」宮次男『古美術77』一九八六年、三彩新社

- ⑧ 昭和五十八年(一九八三)八月一日海浜ホテル所有者故菅沼公吉氏(同年二月没)の遺言によって寄贈された。市は同五十九年(一九八四)一月より、三三〇〇平方メートルの内、一五三〇平方メートルを美術館改

装にあてた。総工費七二五〇万円。同年三月工事終了。(大分合同新聞 昭和五十九年四月十九日参照)

- ⑨ 昭和五十八年度調査で、洋画五五点、日本画二二点、書跡、工芸、彫刻など合計九二点の美術品。

- ⑩ 旧物産館(流川二丁目角)あとに昭和五十二年(一九七七)八月に開設。主に民俗資料、考古資料を中心として展示、無料開放する。移転後は、商工会館となる。『別府歴史年表』安部巖 昭和六十年参照、収蔵資料は約二〇〇〇点(五十八年度調査)

- ⑪ この原画は、富永一朗『漫画集一朗ミステリー』(日本芸術出版社)昭和五十八年に収録済。

ちなみに、当館の他に、昭和六十三年(一九八八)十一月一日、全国初の漫画担当学芸員のいる「川崎市市民ミュージアム」がオープンしている。(『芸術新潮 漫画もある公立美術館、川崎市市民ミュージアム』昭和六十三年十二月号参照)

- ⑫ 移転開館以前は、他の美術館の企画展等には、原則として参加していなかった。以下は参加展と作品データ。

・「小出檜重生誕一〇〇年展」昭和六十二年八月二十九日—九月二十七日 神奈川県立近代美術館

『卓上草花』一九二七 一〇六×五四・〇 カンバス・油彩

・「日本近代洋画の歩み展」昭和六十二年十月二十日—十一月二十九日 大分県立芸術会館

安井曾太郎『裸婦』一九一三 七三・〇×六〇・〇 カンバス・油彩

小出檜重『卓上草花』一九二七 一〇六×五四・〇 〃

・「岡山県立美術館開館記念展 瀬戸内風景展—近代画家の眼—」

昭和六十三年四月三十日—五月二十九日 岡山県立美術館

伊谷賢蔵『別府朝焼』一九五五 一一〇×一四四 カンバス・油彩

江藤純平『小豆島』制作年不詳 九〇×一一六 〃

・「中谷泰展」昭和六十三年四月二日―五月八日 三重県立美術館

『魚(厨房B)』一九五三 四〇・九×六〇・六 カンバス・油彩

・「片多徳郎展」同年十月二十八日―十一月二十七日大分県立芸術会館

『中禅寺湖』一九一七 八〇・〇×六〇・〇 カンバス・油彩

『ある娘の顔』一九二九 四一・三×三一・五

『牡丹』不詳 二三・二×三三・〇 板・油彩

⑬ 「佐藤慶太郎と東京府美術館Ⅰ」(『東京都美術館紀要Ⅺ』齊藤泰嘉、P

二四、四行) 一九八六年度参照

⑭ 当館沿革史メモによる

⑮ 当館沿革史によると、昭和二十六年(一九五二)二月十日、故佐藤慶太

郎の夫人、美術館々長兼子鎮雄氏等多数の関係者が出席したようであるが、内容、場所は不明である。

⑯ 昭和二十六年(一九五二)十月十日―二十日まで、別府市美術館(現、別府中央公民館三階)で公開された。東京府が慶太郎に贈呈した画帳。主に東京出身の画家達の作品一八点がおさめられている。

今回、参考資料にと、東京都美術館より画帳表題のコピーと目録コピーを提供していただいた。なお目録には、当時の別府市美術館使用のスタンプがおされている。

⑰ 昭和十年(一九三五)三月一日、慶太郎の寄付金一五〇万円によって「佐藤新興生活館」として創立。同年十月八日法人許可、昭和十六年(一九四一)四月一日、財団法人日本生活協会と改称。所在地、東京都三鷹市下連雀四―一六―三六、『協会のしおり』日本生活協会参照

⑱ 権藤種男(二八九一―一九五四) 大分県大分市出身

明治四十五年(一九一三)東京美術学校図画師範科卒業、大正六年(一九一七)第十一回文帝に初入選、以後、外光派的な明るい作品を官展中心に発表しつづけた。昭和五年(一九三〇)第十一回帝展特選、以後無鑑査となる。大平洋戦争後は大分に戻り、郷土美術の発展に大きく尽力

した。

・三浦直政(二八九七―一九八八) 大分県速見郡日出町出身

大正十年(一九二二)東京美術学校図画師範科卒業、昭和三年(一九二八)同七年(一九三二)母校の美術学校で手工・自在画を教えた。

また、彫刻家、朝倉文夫の愛娘達の家庭教師等も務めた。

昭和十七年(一九四二)第五回新文展に入選。戦時は大分に戻り、別府市に居住。別府市美術協洋画部々長なども務め、大分県ならびに別府市の美術発展に貢献した。

⑳ 『大分県史美術篇』大分県 昭和五十六年 P 608―P 610参照
以下の作品 日本画

徳岡神泉『柿』 松本一洋『ほととぎす』 金島桂華『蕪』

菊池契月『紫式部』 山口華楊『鴨』 福田平八郎『桃』

村上華岳『夏峯』

洋画

林武『静物』 荻須高德『街頭風景』 権藤種男『李花』

岡田謙三『洋婦人』 三岸節子『花』 小磯良平『人物』

中村研一『高崎山』 猪熊弦一郎『崖』 小出檜重『卓上草花』

梅原龍三郎『小姐』 片多徳郎『中禅寺湖』 安井曾太郎『裸婦』

佐藤敬『パンをもつ子』 当館台帳、受入順。

㉑ 前掲『協会のしおり』(財団法人 日本生活協会) コピー

このしおりには、慶太郎が寄付した事で設立された施設紹介が掲載されている。本稿の資料は、当時の佐藤与助氏の写真とともに紹介されている。

㉒ 旧別府市公会堂

昭和二年(一九二七)着工、同三年完工。昭和八年(一九三三)発行の『別府市誌』(別府市)によると、建坪二一八二平方メートル。白亜の地上二階、地下一階の建物だった。講堂と食堂、各種の部屋を設け、

当時としては注目の公会堂である。のち、昭和二十五年に別府市の公民館として転用され、昭和四十二年（一九六七）から翌年にかけて改造、当時の地下一階が現在の一階になり、三階建ての建物となる。『別府市誌』（別府市役所）昭和六十年参照

②③ 現物は残っていない。当館メモによる。

②④ 作品データは次の通り。

・岡田三郎助『佐藤慶太郎肖像』九〇・〇×七一・〇カンバス・油彩

・朝倉文夫『佐藤慶太郎像』高さ七〇センチ、ブロンズ

いづれも、もとは東京都美術館開館十周年記念に、東京府より佐藤慶太郎氏に贈られた作品であった

②⑥ ②⑦ ②⑧ 『美術館と生活館の創立者 佐藤慶太郎』財、日本生活協会

加藤善得著）昭和四十九年参照

②⑨ 右同書 P 6、9 行

③⑩ 右同書 P 17 下段 1 行～15 行

③⑪ 右同書 P 26 下段 7 行～10 行、又（『東京都美術館紀要 XI』'86 P 22 28 行～30 行

③⑫ 『東京都美術館紀要 XI』'86 P 26 7 行～10 行

③⑬ バセドウ氏病の治療と研究で有名な野口病院（別府市野口中町）は慶太

郎の寄付金を基に、院長を野口雄三郎として開院した。大正十一年（一

九二二）右同書 P 46 上段 16 行

③⑭ 右同書 P 67 上段

③⑮ 右同書 P 67 下段 6 行

③⑯ 右同書 P 68 上段 9 行

③⑰ 『東京都美術館紀要 XI』'86 P 24 5 行～8 行、左段

③⑱ 〃 P 24 22 行～28 行、右段

③⑲ 当館では毎年四月、八月、十月、一月の四期間中の二週間入館者の動行調査として、地域別入館者数調査を行なっている。

昭和六十三年、中間調査結果としては、約六〇パーセントの入館者が県外を占めている。